

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(小学校用)

都道府県名	岐 阜 県
-------	-------

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	高山市立北小学校					フロンティアチャー	前原 雅樹		
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	3	4	3	2	24	32
児童数	129	130	136	119	123	116	8	761	

研究の概要

1. 研究主題

<p>感動ある授業を求めて ~個に応じたきめ細かな指導で、学ぶ意欲、学び方、学び合いを 育てることを通して~</p>

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

本校では特色ある教育活動は「教科指導」であるとし、平成14年度より「感動ある授業」を求めて、各教科の研究を推し進めている。なぜなら、子どもの心に感動を生み出す授業を行うことで、学習内容が感動とリンクし、それが子どもに学力(基礎・基本をもとに、自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力や、豊かな人間性、健康と体力などの21世紀に通用する「生きる力」)をつけることになると考えたからである。

この感動ある授業を具現するために、私たちは学校の教育目標の3つの柱である「自主性」「創造性」「社会性」という視点から授業を見つめてみた。そして、自主性とは「学びたいという意欲」、創造性とは「その子なりの学び方」、社会性とは「仲間との学び合い」であるととらえた。そして、個に応じたきめ細かな指導によって、この3つの姿を育てることで「感動ある授業」を創り出そうと実践を進めてきた。

私たちは、個に応じたきめ細かな指導の一つの手だてとして、昨年度より算数科において少人数指導を実施してきた。本年度は、国語科、理科も加え、3教科において少人数指導を実施している。ここでは、この3教科における少人数指導の実施学年と実施理由について述べる。

教 科	実施学年	実 施 理 由
国語科	4年生	・発達段階を考えるとこれまでの生活体験や読書量によって、読み取ったことを自分なりにまとめる力に差が出始めるため、この時期に話す力・聞く力を育てるのによいと考えた。
算数科	1、2年生 (TT指導)	・1、2年生は、学級母体での学習の学び方や交流の仕方を身につける発達段階である。 ・教室環境を考えると、1階に余裕教室がなく効率的な授業ができない。
	3～6年生	・個々の実態に開きがあり一斉で授業を行うことが困難な場合がある。 ・大きく3つのタイプ(計算や理解の早い児童、そうでない児童、その中間の児童)に対応した指導がしやすくなる。
理 科	6年生	・観察・実験が難しくなるため、理科専科が指導に入ることによって観察・実験の指導が充実する。 ・子どもの多面的な見方・考え方を育てることが大切だから。

(2) 年次ごとの計画

平成 14 年 度	<p>テーマ 感動ある授業を求めて ～個に応じたきめ細かな指導で、学ぶ意欲、学ぶ力、学び合いを育てることを通して～ 仮説</p> <p>教科の授業において、子どもの自己評価、個に応じた指導・援助、学習集団の在り方を工夫することによって、子どもの学びたいという意欲、その子なりの学び方、仲間との学び合いが育ち、一人一人の子どもの心に感動が生まれ、学力が育つであろう。</p> <p>研究内容・方法 【研究内容1】 子どもが教科の学び方を体得したり、自分の学習活動を振り返って自己の変容を自覚したり、次の時間への意欲や目的意識をもつことができる自己評価の在り方。 ・どの場で行うのがよいか。 ・どのような内容がよいか。 ・どのような方法で行うのがよいか。</p> <p>【研究内容2】 一人一人の子どもが自分の考えで課題追究を行い、課題に対する自分の考えをもつことができる、個に応じた指導・援助の在り方。 ・どの場で子どもの実態を把握するとよいか。 ・どのような方法で子どもの実態を把握するとよいか。 ・把握した実態をもとに、どのような指導・援助を行うとよいか。</p> <p>【研究内容3】 一人一人の子どもが、仲間との学び合いを通して自分の考えを高めることができる学習集団の在り方。 ・どの場に学び合いを位置付けるとよいか。 ・どのように学習集団を組織するとよいか。 ・学習集団の中で、どのようにして学び合いを育てるとよいか。</p>
--------------------	---

平成 15 年 度	<p>14年度の実践の結果、意欲につながる自己評価、つまずきに応じた指導・援助、小集団での学び合いが手だてとして有効であったが、子どもの特性の評価、子どもの特性を生かす指導、子どもの目的に応じた小集団の編成、小集団での学び合いに課題が残った。 よって、研究テーマ、仮説は継続し、研究内容の一部を改善した。</p> <p>【研究内容1】 一人一人の子どもが、目的意識を持ち続けることができる評価の在り方。 ・一人一人の子どもの意識につながる自己評価を具体化する。 ・一人一人の子どもの特性をつかむ教師の評価を具体化する。</p> <p>【研究内容2】 一人一人の子どもが、自分なりの方法で課題を解決することができる、個に応じた指導・援助の在り方。 ・一人一人の子どもの特性に応じた指導・援助を具体化する。 ・一人一人のつまずきに応じた指導・援助を具体化する。</p> <p>【研究内容3】 一人一人の子どもが、自分の見方や考え方、技能を高めることができる学習集団の在り方。 ・一人一人の子どもの目的に応じた小集団づくりを具体化する。 ・一人一人の子どもの見方や考え方、技能が高まる学び合いの方法を具体化する。</p>
--------------------	---

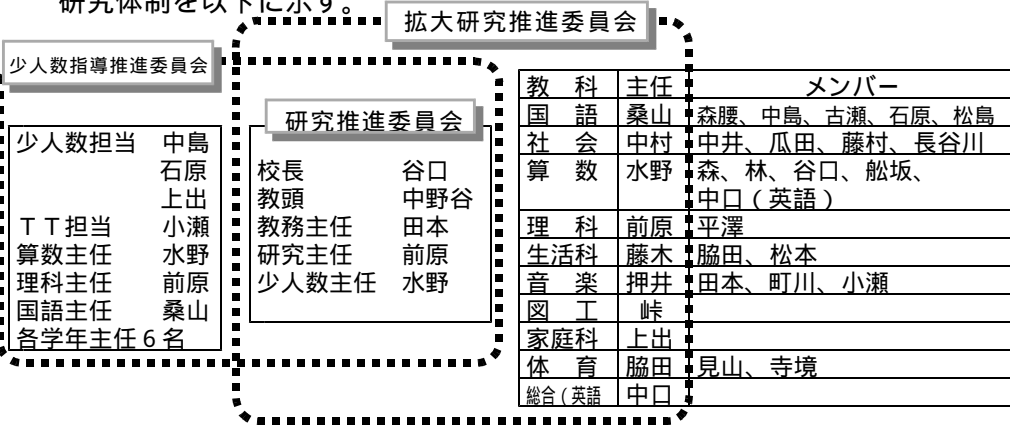
平成 16 年 度	<p>・研究テーマ、仮説は継続し、研究内容と具体的な手だてなどは見直しをしながら、継続していく予定。 ・可能ならば、理科、国語科における少人数指導を他学年でも実施したいと考えている。</p>
--------------------	---

(3) 研究推進体制

<p>算数科、国語科、理科におけるにおけるT T指導、少人数指導に関しては、次のような方法で研究を進めた。 余剰教室のうち2教室を算数教室として、資料室の半分を国語教室として活用する。 少人数指導にあたる教員と時間数は以下の通りである。</p>
--

担当者	担当教科と少人数指導時間数	専科	少人数指導時間数
教務主任	1年算数TT指導 (週3×2クラス)	専科	5年算数少人数指導 (週4×4クラス)
生徒指導	4年算数少人数指導 (週3×3クラス)	加配B	1年算数TT指導 (週3×2クラス)
	4年国語少人数指導 (週3×1クラス)		2年算数TT指導 (週3×4クラス)
加配A	6年算数少人数指導 (週5×3クラス)	加配C	3年算数少人数指導 (週3×4クラス)
	6年理科少人数指導 (週2,3×3クラス)		4年国語少人数指導 (週3×2クラス)

少人数・TT指導推進委員会を設置し、定期的実践の結果を交流し合い、指導方法を改善する機会とする。(月に1回程度)
 少人数・TT指導推進委員会の構成メンバーは校長、教頭、教務主任、研究主任、算数主任、国語主任、理科主任、少人数指導主任、少人数担当及び各学年主任とする。
 職員会には、少人数指導とTT指導の成果と課題を少人数指導主任より提案し、よりよい少人数指導とTT指導の在り方についての方向性を示す。
 少人数指導とTT指導についての授業実践を公開し合い、よりよい指導方法を開発する。
 指導の成果をアンケート調査やペーパーテストなどにより数量的に計測する。研究体制を以下に示す。



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

私たちは日々、子どものノートや発言、行動観察、自己評価などを基にして子どもの学力の評価を行っているが、より多面的に客観的なデータを得て研究実践を考察しようと考えた。そのデータに基づいて成果を述べる。

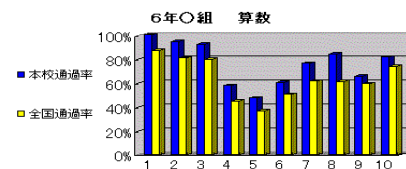
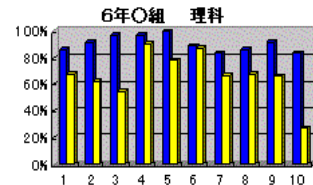
(1) 国立教育政策研究所の教育課程実施状況調査結果との比較結果から

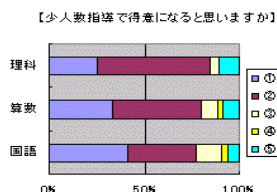
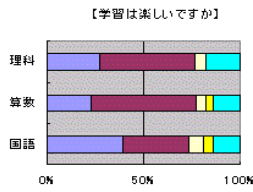
平成13年度、国立教育政策研究所が行った教育課程実施状況調査と同じ設問を、本校5、6年生の抽出クラスでも行い比較した。昨年度も同様な調査を行っているが、今年度も全ての問題において国研の設定通過率と全国通過率を上回るという結果となり、学力がついたといえる。

(2) アンケートの意識調査から

子供に対するアンケート結果より

少人数指導実施学年の子どもに対し、教科ごとにアンケートを行った。結果は、下図のとおりであった。





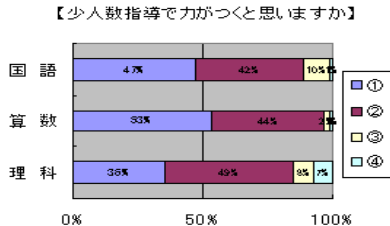
はい
 どちらかといえばはい
 どちらかといえばいいえ
 いいえ
 どちらでもない

アンケート対象
 国語 = 4年生 (119名)
 算数 = 3~6年 (492名)
 理科 = 6年生 (116名)

国語科、算数科、理科の3教科において、7割を超える子どもが「学習が楽しい。」と答えた。3教科に共通して、「発表がしやすい。自分のペースでできる。よく分かる。」という意見が挙げられた。また、3教科ともに約8割の児童が「少人数でその教科が得意になる。」と回答している。主な意見として、「間違えても安心できる。質問しやすい。先生にすぐに教えてもらえる。自分がやってみたくらいのことができる。」などが挙げられた。特に、本年度から実施した国語科と理科では、「自分がやってみたくらいのことができる。」という意見が多く、課題別や法別の指導が子どもの意欲をこれまで以上に向上させていることが分かった。また、算数では「選んだコースが自分に合っている。」という意見が多くあり、子供にとって満足できる指導形態であることがわかった。以上のことから、3教科ともに少人数指導によって子どもの意欲が向上すると共に、子ども自身が学力の向上を実感することができたと言える。

保護者に対するアンケート結果より
 保護者の方に対しては、「少人数指導で力がつくと思うか」をたずねた。

3教科とも8割を超える方が「力がつく」と考えている。中でも算数では、97%と100%に近い保護者が支持している。昨年度からの取り組みが理解され、子どもたちの家庭での学習の様子にもよい効果が現れていると考えられる。



はい
 どちらかといえばはい
 どちらかといえばいいえ
 いいえ

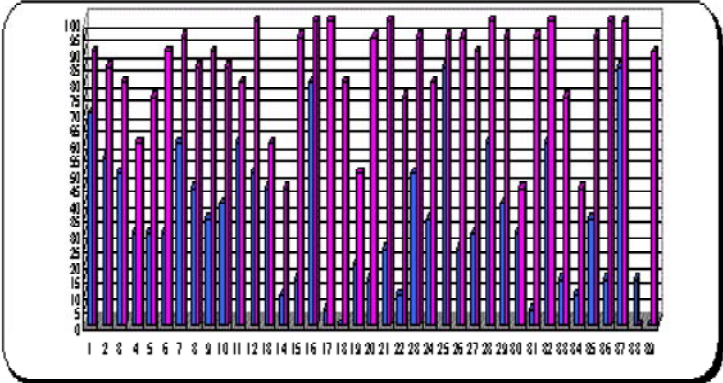
アンケート対象
 761名の保護者

保護者の方の意見にも、3教科に共通して「学校での学習のことを家でよく話すようになった。宿題にじっくり取り組むようになった。自分ひとりで取り組むようになった。授業では、質問しやすいと子どもが言っている。分からずにいる子の発見が早い。」等というような意見が多くあった。また算数では、「その子に合ったペースで進められるのがよい。」という意見が多くあり、昨年度あった「できる子、できない子という劣等感を生まないか。」という懸念も、ほぼ解消できたことが分かった。

(3) 単元前後における学力調査

【 ■ 単元前の正答率 ■ 単元後の正答率 】

単元における子どもの学力の変容を評価するために、単元前のテストやアンケートと同じものを単元後に再度行って結果を比較することを試みた。右図は、4年組の算数科「式と計算」での実践である。事前には4割であった平均正答率は、習熟度別の少人数指導を行った後では8割以上となっており、満足できる状態といえる。学習後の段階で、伸びや点数の低い児童については、補充学習を組んだり家庭学習との連携を図ったりすることで学習内容の定着を行った。



2. 今後の課題

子どもに確かな学力を身につけさせるために、個に応じたきめ細かな指導をさらに充実させていきたいと考える。具体的には

- (1) 子どもにとって学習課題が切実感あるものになるように工夫していきたい。
- (2) 子どもの特性を高める工夫をしていきたい。
- (3) 仲間との学び合いの質を高める工夫をしていきたい。
- (4) 可能ならば、理科・国語の少人数指導を他学年でも実施したい。

学力等把握のための学校としての取組

本校では、研究内容に「子どもの特性をつかむ教師の評価」を位置付け、先述したように、単元前のプレテストやアンケートによる実態調査、行動や発言、作品や学習ノート、子どもの自己評価や相互評価等を基に、子どもの学力の評価に取り組んできた。また、研究仮説をより客観的なデータに基づいて検証するために、子どもの変容を客観的にとらえようと考え、以下の方法で子どもの学力を把握した。

教科の学習に関するアンケート調査の実施(4月・12月)

少人数指導に関するアンケート調査の実施〔子ども・保護者〕(4月・12月)

単元の学力の高まりの調査の実施(単元終了時)

教育課程実施状況調査と同一問題の実施(12月)

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

以下のとおり「フロンティアスクール公表会・飛騨地区協議会」を開催し、実践の成果を地区に公表した。

テーマ：「感動ある授業を求めて ～個に応じたきめ細かな指導で、学ぶ意欲、学ぶ力、学び合いを育てることを通して～」

日時：平成16年1月23日(金)

主な日程：公開授業 ～ (全教科、全学級公開) 全体会、教科ごとの分科会

対象：飛騨地区小・中学校(約250名が参加)

全体会、分科会での協議や、公表会参加者の感想などからは、本公表会で学んだことを是非自校の実践に生かしたいとの声が大変多く聞かれた。このことから授業、研究紀要、全体会、分科会を通して、成果と課題を普及する事ができたと考える。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上

【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他

【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無